

『地域再生の失敗学』

飯田泰之，木下斉，川崎一泰，入山章栄，林直樹，熊谷俊人 著

国際領域 上席主任研究官 中村 出

近年，全国各地で行われているゆるキャラ，B級グルメ等による「まちおこし」。その活気あふれる様子を見て地域に明るい未来を感じる人もいるでしょう。一方で，本当に地域に役立っているのか，税金の使い道として適切なのか等の疑問を持つ人もいます。本書では，民間事業家，大学の研究者，地方自治体の首長ら6人の専門家が，そんな疑問に挑み，解決策を模索します。

冒頭，編集を担当した経済学者は，「まちおこし」のような地域再生の取組が目指すべき目標を「地域の平均所得が向上すること」と捉え，行政が主導してきた従来の取組は基本的に失敗であると断じます。その理由として，行政は，「儲けること」や経済活動に不可避な「不平等」への対応が苦手であることを挙げ，これからは民間が主導するべきとし，さらには，従来の取組が失敗であることを認め，その原因を分析し，教訓を学ぶべきと主張します。

本書では，この「民間主導」と「失敗から学ぶ」をコンセプトとして，各専門家が，自らの経験や専門知識を活かして，従来の取組の問題点やこれからのあり方等について持論を展開します。

第1章では，民間事業家が，従来の取組が失敗する理由や民間主導で取組を行う意義について，続く第2章では，経済学者が，地方自治体と国の財政の違いや構造的に抱える問題点，官民連携のあり方について述べています。また，第3章では，経営学者が，魅力ある人の育成やコミュニケーションの場を提供することへの支援の必要性について，続く第4章では，農学者が，人口減少社会における地域再生の具体的な方策について農村や集落の移転を例に述べています。最後の第5章では，地方自治体の首長が，地域再生における官と民，国と地方公共団体が果たすべき役割について述べています。

各章で述べられている内容は，いずれも興味深く説得力があります。例えば，第1章では，従来の「まちおこし」のほとんどが，採算性や長期的視野に欠けており，誰にアピールするのか，何によって収益をあげるか等，民間なら当然持つべき視点が欠如し

ていることが具体的に述べられています。また，第2章では，一律の行政サービスを補償する地方交付税や地価の上昇分が適切に徴税に反映されない等の国のしくみによ

て，地方自治体から儲けようという意欲が奪われてしまうメカニズムが述べられています。

一方で，読者によって意見が分かれる内容もあります。例えば，第4章で言及されている農村の移転に関して，多面的機能への影響を懸念する読者もいるでしょう。

もっとも，本書のコンセプトとなっている「民間主導」は，特に目新しい発想ではなく，財政の健全化や行政の硬直した発想を打破するための有効なツールとして，既に様々な施策に取り入れられています。しかし，その有効性は明確としても，社会・経済環境がそれぞれ異なり，多様な要素が複雑に絡み合う地域再生という課題に対しては，確固たる手法が存在しないため，具体的にどのように取り組むかは，関係者にとって重大で切実な課題です。本書では，立場や視点が異なる複数の専門家による考察に加え，各専門家と編集を担当した経済学者との対話を通じて，解決の糸口をコンセプトの一貫性を保ちつつ分かりやすく示しています。

地方に行くと閑散としたシャッター商店街や廃墟となった家屋等をよく目にしますが，このまま人口の減少が進めば，このような光景がますます増えていくことは容易に想像できますし，日本の未来に漠然とした不安を覚える人も多いと思います。

そう考えると，地域再生の問題は，その地域だけでなく，日本人すべてにとって切実で身近な問題であり，日本経済が好循環を迎えている今こそ，真剣に取り組むチャンスなのかもしれません。本書は，そのことを読者に再認識させてくれるとともに，地域再生の関係者に新たな気づきや発想を与える一冊となっています。



『地域再生の失敗学』
著者／飯田泰之，木下斉，川崎一泰，入山章栄，林直樹，熊谷俊人
出版年／2016年
発行所／(株) 光文社